

上海博物館藏戰國楚竹書『彭祖』譯注

小寺敦

〔主要参考文献〕

- 圖版：馬承源主編『上海博物館藏戰國楚竹書』（三）（上海古籍出版社、2003年12月）
李零「彭祖」釋文（馬承源主編『上海博物館藏戰國楚竹書』（三）、上海古籍出版社、2003年12月）
李銳「『彭祖』補釋」（簡帛研究 h p、2004年4月19日）
徐在國「上博竹書（三）札記二則」（簡帛研究 h p、2004年4月26日）
楊澤生「上博竹書第三冊零釋」（簡帛研究 h p、2004年4月29日）
黃人二・林志鵬「上博藏簡第三冊彭祖試探」（簡帛研究 h p、2004年4月29日）
黃錫全「讀上博『戰國楚竹書（三）』札記數則」（簡帛研究 h p、2004年6月22日）
趙炳清 a「上博簡三『彭祖』補釋」（簡帛研究 h p、2005年1月26日）
鄭玉姍「讀『上博（三）』筭記」（簡帛研究 h p、2005年4月15日）
孟蓬生「『彭祖』字義疏證」（簡帛研究 h p、2005年6月21日）
湯淺邦弘「上博楚簡『彭祖』における「長生」の思想」（『中國研究集刊』37、2005年6月）
黃人二『上海博物館藏戰國楚竹書（三）研究』（高文出版社、臺中縣沙鹿鎮、2005年8月）
李綉玲撰寫 季旭昇訂改「『彭祖』譯釋」（季旭昇主編『上海博物館藏戰國楚竹書（三）』讀本』、萬卷樓、臺北、2005年10月）
趙炳清 b「上博三『彭祖』篇的性質探析」（簡帛研究 h p、2005年11月20日）

注(1) 黃人二・林志鵬の略稱は黃&林とする。

注(2) 李綉玲論文は、季旭昇の著述部分を含むが、略稱は李綉玲で代表させる。

注(3) 趙炳清 b の釋文は、通行字を用い、假借字は直接讀むと斷っているが、隸定字と假借字の區別をつけ難いため、本稿では便宜上全て隸定したものとして扱う。

〔はじめに〕

上海博楚簡『彭祖』を検討するにあたっては、その内容が難解なこともあり、まず簡の配列の問題を整理する必要がある。先行研究はおおむね李零の配列に従うが、趙炳清 a は、簡 1 → 簡 2 → 簡 5 → 簡 3 → 簡 4 → 簡 6 → …… → 簡 7 → 簡 8 のように竝べなおし、第 5 號簡を第 3 號簡の前に移し、第 6 號簡と第 7 號簡の間に缺落があることを

述べる。これに對し、李綉玲は、簡 1 → 簡 3 → 簡 2 → 簡 5 → 簡 6 → …… → 簡 4 → …… → 簡 7 → 簡 8 とする。第 1 號簡末尾から第 2 號簡冒頭が接續するとすれば、彭祖の回答が、天の道に關することから、いきなり天・地・人の解説に入っており、意味がやや通じにくい。その點、第 3 號簡が第 1・2 號簡の間に入るという李綉玲説の方が、天の道から人に關する議論にすんなりと移行するため、文脈からいって説得的である。よって、その部分だけ李綉玲説に従い、そのほかはとりあえず圖版の配列のままにしておく。

簡長約 53cm で、編綴痕が 3 つあり、經の可能性がある。編綴痕の間隔から考えると、第 3・6 號簡の編綴痕は、第 2 または第 3 のそれである。李零がいうように、第 5 號簡には大きな契口が 1 つあり、第 8 號簡の最後の文字の直後には、文章の末尾を示す墨鈎がある。

また、黄&林（黄人二も同様）・李綉玲は、それぞれ押韻する個所に關する違いはあるものの、本篇が押韻することを指摘している。

以下に各簡の字數・全長・契口數・各契口部までの距離（單位 c m）を記しておく。第 5 號簡の契口部にはかなりの幅があるため、最小・最大距離を示してある。

竹簡番號	字 數	全 長	契 口 數	契 口 1	契 口 2	契 口 3
1	53	53.5	3	9.9	27.4	44.7
2	52	51.7	3	9.8	27.0	44.0
3	22	22.4	1	13.8		
4	21	19.4	1	8.4		
5	24	23.6	1	7.4~9.1		
6	25	25.6	1	15.8		
7	53	53.0	3	9.9	27.4	44.4
8	40	53.0	3	9.9	27.3	44.5

〔釋文〕

（第 1 號簡）

狗老昏于彭【1】祖【2】曰、句是嬰【3】心不忘、受命美長。臣可嬰【4】可行、而嬰【5】於朕身、而泌【6】于帝裳【7】。彭祖曰、休才、乃廼【8】多昏因由、乃不遊【9】斥【10】。皮天之道、唯互

（第 3 號簡）

……□【11】、不智【12】所冬■。狗老曰、𦉳【13】舍朕孳、未則于天、敢昏爲人。彭祖曰【14】……

(第2號簡)

言、天地與人、若經與緯、若纒【15】與裏。昏【16】、三迭丌二、幾若已。彭祖曰、于、女孳專昏。舍【17】告女人綸曰、戒之母喬、斲【18】冬保裳。大箠【19】之婁【20】、難【21】易訖【22】欲。舍〔告汝〕【23】……

(第4號簡)

既只於天、或椎於困【24】。夫子之息登矣、可丌宗。古君之悉【25】、良……【26】

(第5號簡)

……父子兄弟。五紱【27】必周、唯貧必攸。五紱不工、唯福必避。舍告女咎【28】……

(第6號簡)

……忌【29】之慙【30】不可行、述惕之心不可長、遠慮甬素、心白身澤。參【31】告女咎。

(第7號簡)

〔不〕怀【32】者不己、多忒【33】者多息、𦉳【34】者自𦉳也■【35】。彭祖曰、一命戈【36】覆【37】、氏胃益愈。一命三覆、氏胃自厚。三命四覆、氏胃百嘗之室。一命戈臙【38】、氏胃故【39】吳【40】。戈命三【41】〔臙〕【42】

(第8號簡)

氏胃不長。三命四臙、氏胃𦉳【43】繚【44】。毋故【45】臙【46】、毋𦉳【47】𦉳、毋向𦉳【48】。狗老或拜旨首曰、朕孳不勛【49】、既尋昏道、忒弗能守【50】
■。

【訓讀】

(第1號簡)

狗(耇)【51】老、彭祖に昏(問)いて曰く、「句(耇)是(氏)【52】は嬰(執)【53】心して忘れず、命を受けて兼(永)【54】長す。臣、可(何)を嬰(藝)し可(何)を行【55】はば、而(よ)く朕【56】の身に嬰(舉)【57】がり、而く帝(帝)・棠(嘗)【58】に泌(謚、やすらか)【59】ならんか。」と。彭祖曰く、「休なる才(哉)【60】、乃ち𦉳(將)【61】に多く因由を昏(問)はんとし、乃ち𦉳(度)【62】を避(失)【63】はず。皮(彼)の天の道、唯だ互に【64】

(第3號簡)

……□、冬(終)はる所を智(知)らず。」と。狗(耇)老曰く、「𦉳(𦉳𦉳、

ばうばう)【65】として舎(余)朕孳(孳)【66】、未だ天に則【67】らず、敢へて人と爲りを昏(問)はん。」と。彭祖曰く、「……

(第2号簡)

言ふ【68】、「天・地と人とは【69】、經と緯との若く、纒(表)【70】と裏との若し。」と。昏(問)く、「三、丌の二を迭(去)らば【71】、幾(豈、あに)已むが若きならんや【72】。」と。彭祖曰く、「于(吁、ああ)【73】、女(汝)、孳(孳孳)

【74】として専(敷)【75】く昏(問)ふ。舎(余)、女(汝)に人綸(倫)【76】を告げて曰く、之を戒むるも喬(驕)【77】る母く、冬(終)はりを斲(慎)み裝(勞)を保つ【78】。大筭(匡)【79】の囊(要)【80】は、難(難)【81】易あるとも欲を詘(滞)【82】す。舎(余)〔汝に……を告ぐ〕【83】……

(第4号簡)

既にして天に只(底、いた)【84】り、或(又)困(淵)【85】に椎(墜)【86】つ。夫子の息(徳)【87】登【88】れり、可(何)ぞ丌れ宗(崇)【89】めん。古(故)に君の忝(愿)【90】むや、良……

(第5号簡)

……父子兄弟。五紵(紀)【91】必(畢、ことごと)く周(いた)【92】らば、貧なりと唯(雖)も必ず攸(修)【93】めん。五紵(紀)工(巧)【94】あらざれば、福(富)ありと唯(雖)も必ず避(失)はん。舎(余)女(汝)に咎(禍)【95】を告げ……

(第6号簡)

……忌、忌の愆(謀)【96】行ふべからず、述(枕)惕の心【97】長くすべからず、遠く慮りて素を甬(用)【98】ひれば、心白く身澤(釋)【99】す。余(余)女(汝)に咎を告げん【100】、

(第7号簡)

怀(負)は〔ざる〕者は呂(以)ひず、多く忝(謀)【101】る者は多く愆(憂)【102】ひ、愆(賊)【103】ふ者は自ら愆(賊)ふなり。」と。彭祖曰く、「一命【104】戎(一)覆【105】、氏(是)を愈【106】を益すと胃(謂)ふ。一命三覆、氏(是)を自ら厚し【107】と胃(謂)ふ。三命四覆、氏(是)を百眚(姓)の室(主)【108】と胃(謂)ふ。一命戎(一)隳(襄)【109】、氏(是)を吳(殃)【110】に故(遭)【111】ふと胃(謂)ふ。戎(一)命三〔隳(襄)、〕

(第8号簡)

氏(是)を不長と胃(謂)ふ。三命四隳(襄)、氏(是)を縶(輟)【112】を絀(絶)【113】つと胃(謂)ふ。臚(富)【114】を故(逐、したが)【115】ふ母かれ、既(賢)【116】を舛(誇)【117】る母かれ、桓(豎)【118】に向(嚮)【119】する

母かれ。」と。狗（耇）老戎（二）び拜旨（稽）【120】首して曰く、「朕孳（孳）
勛（敏）【121】ならず、既に道を昏（問）ふを尋（得）【122】て、守る能はざるを
忘（恐）【123】る。」と。

【現代語譯】

（第1號簡）

耇老が彭祖にたずねて言った。「耇氏は心にかけてつつしみ怠り安んずることがなく、命を受けて長生きいたしました。わたくしめは、何をわざとし何を行えば、わたくし朕の身がたかまることができ、禘祭（夏祭り）や嘗祭（秋祭り）で安らかになれるのでしょうか。」と。彭祖が言った。「すばらしいことだ。多くことの原因をたずねようとして常軌を逸しない。天の道とは常に【124】

（第3號簡）

……終わるところを知らない。」と。耇老が言った。「知見が暗く、わたくし朕孳はいまだに天の法則に従うことができません。そこで人としてとるべき道をお尋ねいたします。」と。彭祖が言った。「……【125】

（第2號簡）

「天・地・人は、たていととよこいとのようであり、表と裏のようである。」というのである。」と。（耇老が）尋ねた。「天・地・人の3つから天・地の2つを除けば、どうしてそれで終わりだなどというようなことがありますでしょうか（人だけでも問題はない）。」と。彭祖が言った。「ああ、お前はつとめておしひろめて尋ねる。わたしはお前に人倫のことについて言う、「他人を戒めても驕ることなく、物事の終わりを慎んで努力をつくす。大匡の要點は、困難であれ容易であれ欲望を押しとどめるところにある。わたしはお前に……を告げる、……【126】

（第4號簡）

すでに天に至り、また淵に墜ちます。先生の徳は高みに昇ったのです。何を崇めるといのでしょうか。だから君主がつつしめば、良い……【127】

（第5號簡）

……父子兄弟。「五紀」がことごとく充足されれば、貧窮していても必ず人に修養させることができる。「五紀」が善くなければ、富があっても必ず（人）を失うことになる。わたしはお前にわざわざを告げ、……。【128】

（第6號簡）

……の謀は行ってはならない。おそれる心が長くなってはならない。遠く慮り飾りのないようにすれば、心が潔白になり身體がときほぐれる。わたしはお前にあやまちを告げよう。【129】

(第7号簡)

(責任を?) 負わない者は用いず、多く謀略を行う者は多く憂い、(他人を)そこなう者はみずからそこなうのです。」と。彭祖が言った。「一命を受けて一たび遜る、これを賢者を増すという。一命を受けて三たび遜る、これをおのずから厚い(勢力が擴大する)という。三命を受けて四たび遜る、これを人民の主という。一命を受けて一たび驕り高ぶる、これをわざわいに遭うという。一命を受けて三たび〔驕り高ぶる、〕

(第8号簡)

これを「不長(夭折する)」という。三命を受けて四たび驕り高ぶる、これをつながりを絶つ(血統の断絶)という。富に従ってはならず、賢を誇ってはならず、小臣を近づけてはならない。」と。耆老がふたたび敬禮して言った。「わたくし朕尊は明敏ではなく、既に道についてお尋ねすることができましたが、それを守ることができないことを恐れます。」と。【130】

注

- 【1】李零・黄&林・趙炳清 a・b・黄人二・李綉玲は「彭」に作る。黄&林は2つの左はらいが刀となっており、書き誤りもしくは筆順の墨の跡によって自然にできたものと述べる。圖版により李零らに従う。
- 【2】李零・黄人二・李綉玲・趙炳清 bは「祖」に作る。黄&林は、『子羔』では多く「祖」字の下に餘分な筆畫が二つあり、『昔者君老』の「相」字と同じであることを指摘する。ここは李零らに従っておく。
- 【3】李零は「藝」に作る。黄&林・黄人二は、もと「執」・「女」に従うとする。趙炳清 bは「愁」に作る。李綉玲は「執」に作る。類似の文字が郭店楚簡にみえる。圖版により李零に従う。
- 【4】李零は「𠄎」に作る。黄&林・黄人二・趙炳清 bは「藝」に作る。李綉玲は「執(勢一力)」に作る。圖版により李零に従う。
- 【5】李零は「𠄎」に作る。黄&林・黄人二は「營」に作る。李綉玲は「𠄎」に作る。趙炳清 bは「與」に作る。圖版により李零に従う。
- 【6】李零・李綉玲は「泌」に作る。黄&林・黄人二・趙炳清 bは「謚」に作る。趙炳清 aは「必」に作る。圖版により李零らに従う。
- 【7】李零・李綉玲は「棠」に作る。黄&林・黄人二は「常」に作る。趙炳清 aは「必」に作る。趙炳清 bは「嘗」に作る。この文字は上海博楚簡『柬大王泊旱』第2 1 號簡等や郭店楚簡などにみえる。圖版により李零らに従う。
- 【8】李零・李綉玲は「𠄎」に作る。黄&林・黄人二・趙炳清 bは「將」に作る。

圖版により李零らに従う。

- 【9】李零・李綉玲は「遊」に作る。黄&林・黄人二・趙炳清 b は「失」に作る。圖版により李零らに従う。
- 【10】李零・趙炳清 a ・李綉玲は「斥」に作る。黄&林・黄人二・趙炳清 b は「度」に作る。この文字は包山楚簡などにもみられるが、「宅」と隸定されることもある。圖版により李零らに従う。
- 【11】文字の上部が缺けており、不明。
- 【12】李零・李綉玲は「智」に作る。黄&林・黄人二は「智」に作る。趙炳清 a は『廣韻』真韻「智、古文知。」を引用し、「知」の古文とする。趙炳清 b は「知」に作る。圖版により李零らに従う
- 【13】李零は重文であることを指摘する。
- 【14】上部のみが微かに見える。李零・黄&林・趙炳清 a ・ b ・黄人二・李綉玲は「曰」に作る。文脈から李零らに従う。
- 【15】李零・李綉玲は「褻」に作る。黄&林・黄人二・趙炳清 b は「表」に作る。徐在國は、問題となるのは右傍の「衣」字の内部を「暴」の省體とし、「褻」に作る。その證據として郭店楚簡『性自命出』第 6 4 號簡・上海博楚簡『從政』第 1 5 號簡の「暴」と曾侯乙墓竹簡第 4 ・ 5 5 號簡の「褻」を掲げ、この字を「糸」に従う「褻」の聲とし、後世の字書には見えないが、「褻」の繁體ではないかとし、「糸」に従うのは余分に加えられた義符だとする。圖版により李零らに従う。
- 【16】黄&林・黄人二は「昏」の下に「曰」字が脱落しているのではないかとする。
- 【17】李零・李綉玲は「舍」に作る。黄&林・趙炳清 a ・ b ・黄人二は「余」に作る。黄錫全は「舍」に作る。圖版により李零に従う。
- 【18】李零・黄錫全は「斲」に作る。黄&林・黄人二・趙炳清 b は「慎」に作る。李綉玲は「斲」に作る。上海博楚簡『緇衣』第 1 6 號簡等に「慎」の假借字としてみえる。圖版では左上傍が糸に見えない。李零らに従う。
- 【19】李零・李銳・楊澤生・黄錫全・趙炳清 a は「箠」に作る。黄&林・黄人二・趙炳清 b は「匡」に作る。李綉玲は楚系文字の「者」が 7 種類に分かれることを述べつつ、「箠」に作る。李銳は、この字が「箠」に似ているとし、「者」に従う字が上海博楚簡『孔子詩論』第 1 號簡・同『子羔』第 1 ・ 5 號簡にみられることを指摘する。趙炳清 a は、この字が本篇の「者」字と異なり、包山楚簡第 7 0 號簡の「箠」字を「匡」と讀むことを指摘し、李銳説を否定する。圖版により李零らに従う。
- 【20】李零・楊澤生・黄錫全・趙炳清 a は「婁」に作る。黄&林・黄人二は、この字が下傍は女に従い上傍は革の省形に従うことを指摘する。李綉玲はこの文字が、郭店楚簡『性自命出』第 6 2 號簡の「訖」と上海博楚簡『性情論』第 2 7 號簡

- の「要」と釋されている文字と同一としつつ、「𠄎」に作る。趙炳清 b は「要」に作る。圖版により李零らに従う。
- 【21】李零・楊澤生・黄錫全・趙炳清 a・b・李綉玲は「𠄎」に作る。黄&林・黄人二は「難」に作る。圖版により李零らに従う。
- 【22】李零・楊澤生・黄錫全・趙炳清 a・李綉玲は「𠄎」に作る。黄&林・黄人二はこの字が言・欠に従うとする。趙炳清 b は「欠」に作る。圖版により李零らに従う。
- 【23】李零・黄人二・李綉玲・趙炳清 b は「告汝」を二字補う。
- 【24】李零・黄&林・趙炳清 a・黄人二・李綉玲は「困」に作る。趙炳清 a は『説文解字』水部「困、古文淵。從口・水。」を引用する。趙炳清 b は「淵」に作る。郭店楚簡・上海博楚簡に似た文字が見える。
- 【25】李零・李綉玲は「𠄎」に作る。黄&林・黄人二は「願」に作る。趙炳清 b は「愿」に作る。この文字は上海博楚簡『仲弓』第 26 號簡にもみえる。圖版により李零らに従う。
- 【26】上半分のみの殘缺字である。李零・黄人二・李綉玲・趙炳清 b は「良」に作る。ここは李零らに従っておく。
- 【27】李零・李綉玲は「𠄎」に作る。黄&林・黄人二・趙炳清 b は「紀」に作る。圖版により李零らに従う。
- 【28】上部のみの殘缺字である。李零・李綉玲は「𠄎」に作る。黄&林・黄人二・趙炳清 b は「禍」に作る。ここは李零らに従っておく。
- 【29】上部が缺けている。李零・李綉玲は下部が「心」に従うとする。
- 【30】李零・李綉玲は「𠄎」に作る。黄&林・黄人二・趙炳清 b は「謀」に作る。圖版により李零らに従う。
- 【31】李零・李綉玲は「𠄎」に作る。黄&林・趙炳清 a・b・黄人二は「余」に作る。圖版により李零らに従う。
- 【32】一字の缺字。李零は「人」・「不」に従う「𠄎」字のようで、簡牘では多く「負」または「倍」の意味で用いられることを述べ、この句は「不𠄎者不𠄎」に作るのではないかとする。黄&林・黄人二も「不」を補う。ひとまず李零に従っておく。
- 【33】李零・李綉玲は「𠄎」に作る。黄&林・黄人二は「務」に作る。趙炳清 b は「懋」に作る。圖版により李零らに従う。
- 【34】李零は「𠄎」に作る。黄&林・黄人二は「心」に従う「則」の聲としつつも、「𠄎」に作る。趙炳清 a は上が則に従い下が心に従い「𠄎」に作り、望山楚簡第 19 號簡・包山楚簡第 207 號簡・第 220 號簡・郭店楚簡『語叢』二第 27 號簡・第 43 號簡などにこの文字があり、「𠄎」に隸定していることを述べる。

- 李綉玲・趙炳清 bは「惻」に作る。圖版により趙炳清 aに従う。
- 【35】 ここには句讀点らしい符號がある。
- 【36】 李零は「弋」に作る。黄&林・黄人二・趙炳清 bは「一」に作る。李綉玲は「戈」に作る。圖版により「戈」に作る。
- 【37】 李零は「衽」に作る。黄&林・黄人二は「憂」の省に従い「攸」に従うとする。趙炳清 aは、上が「首」または「頁」に従い、下が「攸」に従うとし、「脩」の變體かもしれないとも述べる。李綉玲は「衽」に作る。趙炳清 bは「修」に作る。
- 【38】 李零・趙炳清 a・b・李綉玲は「臙」に作る。黄&林・黄人二は「囊」に作る。趙炳清 aはこの字が「肉」・「囊」に従うとする。圖版により李零らに従う。
- 【39】 李零・李綉玲は「故」に作る。黄&林・黄人二・趙炳清 bは「遭」に作る。圖版により李零らに従う。
- 【40】 李零・李綉玲は「𠂔」に作る。黄&林・黄人二・趙炳清 bは「殃」に作る。趙炳清 aは上が「口」、下が「央」に従うとする。圖版により李零らに従う。
- 【41】 ここの文字はかすれているが、李零らに従っておく。
- 【42】 李零・趙炳清 a・bは「三」の下に「臙」字の脱落があるとする。黄&林・黄人二は「囊」を補う。李綉玲は「臙」と共にその前の「三」も補うが、不適當。この前後は「數字+命+數字+囊」という語句が續くと考えられるため、李零らに従う。
- 【43】 李零・李綉玲は「𠂔」に作る。黄&林・黄人二は「繼」に作り、この文字と説文古文「絶」はその刀口の方向が反對であることを指摘し、誤寫、もしくは既に両者が混用されていた可能性を述べる。趙炳清 aはこの字が「繼」の古文で、「絶」の古文とは刀口の方向が反對だとし、黄&林に従う。趙炳清 bは「絶」に作る。上海博楚簡『緇衣』第2 2號簡等にも同様の用例があるが、同『孔子詩論』の「絶」字は正しく刀口の向きが逆になっている。圖版により李零に従う。
- 【44】 李零はこの字の旁が蔡國の蔡と同じであると述べ、「繚」に作る。李綉玲は李零に従う。黄&林・黄人二は「輟」に作る。趙炳清 bは「綴」に作る。李零に従う。
- 【45】 李零・楊澤生・趙炳清 aは「𠂔」に作る。趙炳清 bは「抽」に作る。圖版により李零らに従う。
- 【46】 李零・趙炳清 a・李綉玲は「臙」に作る。黄&林・楊澤生・黄人二・趙炳清 bは「富」に作る。圖版により李零らに従う。
- 【47】 李零・楊澤生・趙炳清 a・李綉玲は「𠂔」に作る。黄&林・黄人二はこの字が可・力に従うと述べる。趙炳清 bは「𠂔」に作る。上海博楚簡『周易』第2 3號簡に「何」に假借する類似の文字がある。圖版により「𠂔」に作る。
- 【48】 李零・黄&林・楊澤生・趙炳清 a・b・黄人二・李綉玲は「𠂔」に作る。圖版

により李零らに従う。

- 【49】李零・趙炳清 a・李綉玲は「勛」に作る。黄&林・黄人二・趙炳清 bは「敏」に作る。趙炳清 aは「勛(びん)」の省略とし、『集韻』準韻「敏、古从力」を引用する。圖版により李零らに従う。
- 【50】「守」字の下に鈎型の符號があり、その下は空白である。李零はこれが最後の一簡とする。
- 【51】「狗」について。李零・黄&林・趙炳清 a・黄人二は「耇」の假借字とする。黄&林は、音によって意味を求めれば、背中の曲がった老人のことだと分かり、「耇老」であれ「耆老」であれみな一般的な呼稱であって、彭祖に尋ねた時に謙遜して遜った態度であることを明らかにしようがない。ここは「狗」のまま讀むことも可能であって、後世の「狗生」・「畜産」のようにその階級に合わせたり、夭折することを望まないために、こういう賤しい名前をつける。また漢代の人には犬・狗で名付けることが多く、『漢印文字徵』の「犬」・「田犬」・「尹犬」・「左犬」・「張厭狗」といった五つの印や、『漢書』司馬相如傳で司馬相如の初名が「犬子」であるように、もっと卑賤なものにするのであると述べる。趙炳清 aは、『爾雅』釋詁上「耇、壽也。」、『説文解字』老部「老、考也、七十曰老。」を引用し、「耇老」は文獻にはみえないが、王家臺秦簡『歸藏』に「耆老」という人名がみえ、長沙馬王堆帛書『十問』に、耇老が商帝盤庚に「食陰煉腴(せん)」の法を傳授するという記載があり、耇老が道家方仙派の房中術を理解していることを物語っていると述べる。李綉玲は「狗」を、漢印にもみえることなどから、氏のこととする。ここは李零らに従っておく。「耇老」については、他に馬王堆帛書『養生方』第1卷第59～64號簡で、帝盤(盤)庚が耇老に「耇老の陰に妾(接)し神氣を食するの道」について尋ねる文章があり、殷代の人物とされている。
- 【52】「句是」について。李零・黄&林・趙炳清 a・黄人二は「耇氏」の假借字とする。李綉玲は「狗氏」の假借字とし、彼は指導者ではなく臣下だとする。趙炳清 aは、包山楚簡第四・八十九簡などのように楚簡で「是」がしばしば「氏」に假借し、『儀禮』覲禮「太史是右。」鄭注「故是爲氏也。」、朱駿聲『説文通訓定聲』「氏、假借爲是。」、『漢書』地理志下「至玄孫、氏爲莊公。」顏師古注「氏與是同、古通用字。」のように文獻で「是」・「氏」が互いに假借することを指摘する。李零らに従う。
- 【53】「執」について。李零・黄&林・趙炳清 a・黄人二は「執」の假借字とする。趙炳清 aは、ここは「熱」に通じ、「服・畏服」の意味で、『釋名』釋姿容「執、攝也。使畏攝己也。」、『爾雅』釋言「執、脅也。」、朱駿聲『説文通訓定聲』臨部「執、假借爲熱。」、『漢書』陳萬年傳附陳咸「豪強執服。」顏師古注「執、讀爲熱。」を引用し、執心は敬畏の心だとする。「執心不忘」について、孟蓬生は、ここは

忘れるの意ではなく、**好** 𩇑 壺「日夜不忘、大去型（刑）罰」、韓愈『潮州祭神文』「夙夜不敢忘怠。」にみられるような荒寧（おこたりやすんずる）の意であり、「心にかけてつつしみ、怠りやすんずることがない」と解する。孟蓬生の解釋が適當か。

- 【54】「𩇑」について。李零・黄&林・趙炳清 a・黄人二・李綉玲は「永」の假借字とする。黄&林・黄人二は「𩇑」・「永」はともに陽部に屬し、『説文解字』に「𩇑、水長也、从永羊聲。」とあるから、「𩇑」は羊聲に従うものの、二つの字の偏旁が後に音を示すようになったようだと述べる。趙炳清 a は、『説文解字』に「𩇑、水長也、从永羊聲。詩、江之𩇑矣。」とあるが、『詩經』漢廣は「江之永矣」に作り、楊慎『丹鉛雜録』𩇑與永通に「博古圖、永寶用享作𩇑寶用享。」とあって、「𩇑」が「永」に通ずることが分かると述べる。上海博楚簡『周易』第 9 號簡等に假借の用例がみえるため、李零らに従う。「永長」について、時代は下るが、『後漢書』光武帝紀下に「享國永長、爲後世法。」とある。
- 【55】「可嬰可行」について。李零・黄&林・趙炳清 a・黄人二・李綉玲は「何藝何行」と讀む。李零は「藝」は才能を、「行」は徳行を指すとする。趙炳清 a は「可」・「何」が同じく歌部溪紐字であることを指摘する。李綉玲は上海博楚簡『性情論』第 3 號簡に「善不善、性也。所善所不善、執也。」とあり、「執」は「藝」とも讀み、才藝・藝能を指すとする。ここは李零らに従って讀んでおく。
- 【56】「朕」について。李零は第 3・8 號簡からみて「耆老」の名を「朕孳」に作るようであり、ここの「朕」は「朕孳」の略稱かもしれないと述べる。黄&林・黄人二は、第 3・8 號簡の「朕孳」はいずれも自稱であり、上海博楚簡『仲弓』では自稱は名によっており、年長者が年少者に對する場合も名により、他人を稱する場合は字によるのであるから、ここの「朕」は「わたしの」の意味であり、『楚辭』離騷の「朕皇考曰伯庸」の「朕」と同じであり、後の文「乃將多問因由」・「乃不失度」にかかっていると述べる。趙炳清 a は李零説に従うものの、「わたしの」の意味にもとれると述べる。李綉玲は「朕孳」が狗老の名字であり、自稱を省略して「朕」とする例は少なく、第一人稱所有格とするのがよいとする。やや不自然な感もあるが、ひとまず李零に従い、人名として讀んでおく。
- 【57】「嬰」について。李零は「舉」の假借字とする。黄&林・黄人二は、「舉於朕身」では意味が分からず、「營」と讀むのではないかとする。趙炳清 a はこの字が包山楚簡・望山楚簡・郭店楚簡にみえ、一般に「舉」と讀むことを述べつつ、「與」なら更によりとし、「あたえる」の意味と考える。孟蓬生は「舉」・「譽」は與聲に従い假借可能で、馬王堆漢墓帛書『周易』に「譽」を「舉」に作る例などを指摘する。李綉玲は、郭店楚簡『五行』第 3 2 號簡「播遷於兄弟」、上海博楚簡『仲弓』第 8 號簡「民安舊而重遷」が類似の用例であることを指摘し、「遷」の假借

字とする。ひとまず文脈から李零に従っておく。

- 【58】「棠」について。李零は「常」の假借字とする。李零は、楚簡では多く「常」に用いられることを述べる。趙炳清 a は『楚文字編』を調べると熊悍鼎の銘文にこの文字があって「嘗」と読んでおり、包山楚簡第 2 2 2 簡にもこの文字があって「嘗」と読んでいることを指摘し、「嘗」は祭名であり、『爾雅』釋天に「秋祭曰嘗。」とあることを述べる。孟蓬生はこの字の前の「帝」と合わせて「禘嘗」と読んで禘祭・嘗祭のことと解し、『禮記』祭統篇「凡祭有四時。春祭曰禘、夏祭曰禘、秋祭曰嘗、冬祭曰烝。禘者陽義也。嘗者陰義也。故曰、莫重於禘嘗。古者於禘也、發爵賜服、順陽義也。於嘗也、出田邑、發秋政、順陰義也。故記曰、嘗之日發公室、示賞也。草艾則墨。未發秋政則民弗敢草也。故曰、禘嘗之義大矣。治國之本也、不可不知也。明其義者君也。能其事者臣也。不明其義、君人不全。不能其事、爲臣不全。」を引用する。李綉玲は、狗老は狗氏の指導者ではないのだから、ここでは自分自身がどうしなければならないかを彭祖に尋ねているに違いなく、上帝の祭祀を實行する意味ではないとする。李綉玲の理由付けはやや弱く、文脈からここは孟蓬生に従って解釋しておく。
- 【59】「認」について。黄&林・黄人二は「閔」の假借字とする。趙炳清 a ・孟蓬生・李綉玲は「謚」の假借字とする。黄&林・黄人二は慎重の意とし、『尚書』大誥「閔毖我成功所、予不敢不極卒寧王圖事。」、孔安國傳「閔、慎也」を引用し、この文字が「采（番上部の形）」に従い、楚簡の「必」字と極めて似ており、左上角に一つの小さな点があって横畫と連なっており、『説文解字』「辨」の「采」のように読むのではないかとする。そして戦國文字の「敝」左部（この文字は戦國文字では「采」・「巾」に従い、或いは「巾」を省いて「采」に作る）と混用され、「敝」は祭母竝母、「辨」は元部竝母であって音が極めて近い。簡文は「辨」に従って聲を得ており、「謚」と通假可能であり、「必」は脂部幫母（「謚」は同部明母）、「辨」は元部竝母で、元部と脂部の聲音はやや遠いが（中間が微部・文部で隔てられている）、聲母は同系であるとして、この前後を「帝王の常道を行うにあたっておごそかにつつしむ」の意に解釋する。趙炳清 a は『正字通』言部「認、同謚。」、『廣韻』質韻「謚、慎也。」を引用し、「謹慎恭敬」の意とする。孟蓬生も趙炳清 a に従う。隸定を李零説に従っており、言部と必部は通假可能であるため、ここは趙炳清 a らに従っておく。
- 【60】「休才」について。趙炳清 a は、「休」を「すばらしい」の意とし、『爾雅』釋詁下「休、美也。」、『廣韻』質韻「休、美也、善也。」を引用する。「才」を李零・黄&林・趙炳清 a ・黄人二・李綉玲は「哉」の假借字とする。趙炳清 a は『集韻』咍韻「哉、説文、言之閑也、古作才。」、王筠『説文句讀』「夏侯湛兄弟誥、唯正月才生魄、尚書作哉因亦借爲語詞。」を引用する。上海博楚簡『魯邦大旱』

第6号簡等に假借字例がみえる。趙炳清 a に従う。

- 【61】「𨔵」について。李零は「將」の假借字とする。趙炳清 a は『説文解字』「將、帥也。从寸醬省聲。」を引用し、「醬」の省文が「𨔵」であって両者は从紐陽部の字に屬すると述べ、齊璽の「𨔵騎」（『璽匯』0307）を「將騎」と讀むようなものだとする。ここは「將」の假借字としておく。
- 【62】「厖」について。李零・趙炳清 a は「度」の假借字とする。趙炳清 a は、『正字通』尸部「厖、與宅通。」を引用して「厖」は「宅」と同じだとし、『集韻』陌韻「宅、或作度。」を引用して「宅」・「度」を同じだとし、「厖」を「度」と讀めるとする。李綉玲は、「宅」・「度」が古音では定母に屬するとし、趙炳清 a に従う。李零らに従う。
- 【63】「遊」について。李零・趙炳清 a ・李綉玲は「失」の假借字とする。趙炳清 a は包山楚簡第80・142簡、郭店楚簡『老子』甲篇第11簡・同『性自命出』第38簡などにこの字形があつて「失」と讀んでいることを指摘する。李零らに従う。
- 【64】李零は第1号簡末尾と第2号簡冒頭が連続しているとする。意味内容からすると、李綉玲のいうように第1・3・2号簡の順に接續した方がよい。
- 【65】「𦉳」について。李零は、ここは重文で「𦉳𦉳」と讀み、心が暗く亂れている意として『韓詩外傳』卷六「不聞道術之人、則冥於得失。不知治亂之所由、𦉳𦉳乎其猶醉也。」を引用し、狗老の謙遜の言葉とする。趙炳清 a は李零に従い、『玉篇』目部「𦉳、不明兒。」を引用する。孟蓬生は「𦉳」・「眇」が共に明紐宵部にあることから「眇」の假借字とし、『尚書』顧命「眇眇予末小子」の用例に近いとする。假借字をとらずとも意味が通ずるので、李零らに従つておく。
- 【66】「朕孳」について。李零は文脈から狗老の名としつつ、老壽の稱で本名ではないのかもしれないと述べる。黄&林・黄人二は「狗」がこの老人の初名で、「老」が老年の人であることを示しており、「朕孳」がこの老人の本名だとし、「狗」が「𦉳」に假借することからみると、「老壽」を強調しているのではなくて、『莊子』にみえる名前が特異で腰が灣曲して背の曲がった老人のようである。この老の意味は極めて遜っていることは、その名前の字義から分かり、「朕孳」は「遜子」のことであつて謙遜の子の意であり、「朕」・「遜」は互いに假借するが、例えば『緇衣』・『昔者君老』で「孳」・「子」が互いに假借しており、例えば『尚書』金縢篇とその諸引本間の異文に見られる。だがその本名が「朕孳」というのは、自然な状況下では、もはや假借する必要はないと述べる。李綉玲は李零の讀みに従いつつも、「余朕」が「余」、「孳」が「茲」と讀める可能性を指摘し、叔夷鐘「女（汝）台（以）卹余朕身。」、沈子它設蓋「邵（昭）告朕吾考」を引用する。ここは無難な李零説に従い、狗老の名と解しておく。

- 【67】「則」について。趙炳清 a は「見習う、従う」の意味とし、『詩經』小雅鹿鳴篇「視民不佻、君子是則倣。」、毛傳「是則是倣、言可法倣也。」を引用する。孟蓬生は、古音が共に通ずることから「即」の假借字とし、『論語』子張篇「如得其情、則哀矜而勿喜。」の『鹽鐵論』孝養篇における引用文で、「則」を「即」に作ることなどを引用し、この字の前後を「いまだ天道につかず」の意とする。そして、耆老が謙遜して自分は天道に接近することができないとあって、彭祖に人たるの道を尋ねたので、以下で彭祖は天道を論ずることから轉じて人倫を論じたと述べる。
- 【68】「互言」について。黄&林・黄人二は『孟子』離婁上篇「人有互言、皆曰天下國家。天下之本在國、國之本在家、家之本在身。」を引用し、人が常に言う言葉だとする。趙炳清 a は「恆言」の意で、人々が常に言うような意味だとする。
- 【69】「天地與人」について。黄&林・黄人二はこれが三才を指し、上海博楚簡『容成氏』・『楚辭』天問篇・敦煌文書『天地開闢已來帝王記』・『帝王略論』において、この種の文獻で比較的整ったものは天・地・人 3 要素を含んでいることを論證しており、それらの中で天問篇が最も整っているのであって、簡文で三才に言及しているのは、史官の存在する文獻の鮮明な特徴を説明するに足りると述べる。そして『管子』九守篇に「一曰天之、二曰地之、三曰人之、四曰上下左右前後。」、宙合篇「天不一時、地不利、人不一事、是以著業不得不多、人之名位不得殊、方明者察于事。故不官于物而旁通于道。」、馬王堆帛書『六分』に「故王天、王天下者之道、有天焉、有人焉、又地焉。參者參用之、故王而有天下矣。」とあるから稷下の學と関係ある著作だと分かり、内容と簡文のいうところと最も似ていると述べる。また、『老子』第五章には「天地不仁、以萬物爲芻狗。聖人不仁、以百姓爲芻狗。」、『同』第二十五章「人法地、地法天、天法道、道法自然。」とあり、趙炳清 b は本篇を楚の黄老學派によるものとして考えている。しかし、本篇は天・地をとり去って人のみであっても構わないというのである。『老子』第五章で天・地と共に人の仁性を否定したり、『同』第二十五章で人の上に地・天を位置づけていることから分かるように、天・地・人に對する本篇の扱いは、『老子』とは異なっている。
- 【70】「纒」について。李零・徐在國・趙炳清 a ・李綉玲は「表」の假借字とする。黄&林・黄人二は、この字が糸・衣・口・舟に従うが、糸・衣・口に從い受の省聲かもしれない、「受（幽部）」の字形は舟の形の省略で、「表」とは同じ宵部に屬し、『説文解字』には會意・形聲の文字各々一つあり、會意字の方は衣・毛に從い（事實上、「毛」もまた聲符たり得る）、形聲字の方は衣に従う麋の聲だと述べる。趙炳清 a は「經」と「緯」の對應からみると、「里」と對應するのはまさに「表」字だと述べる。徐在國は「褫」・「表」が古く通ずるとし、『呂氏春秋』忠廉篇に「臣請爲褫。」とあるが、『新序』義勇篇では「褫」を「表」に作ることを

指摘し、「表」の假借字とする。李綉玲は「褫」が竝母藥部、「表」が幫母宵部に屬し、藥宵對轉疊韻で通假し得るとする。李零らに従う。

- 【71】「三迭丌二」について。李零・趙炳清 a・李綉玲は「迭」を「去」の假借字とする。李零は「三」が天・地・人を指し、「二」が天・地を指し、「三迭（去）丌二」で餘ったものが人であると述べる。文脈から李零に従う。
- 【72】「幾若已」について。李零は「幾」を恐らく「豈」の假借字だろうとし、簡文に多くその事例がみられることを述べる。李綉玲は李零に従い、上海博楚簡『民之父母』「幾侑君子」を『毛詩』では「豈弟君子」に作ることを指摘し、狗老が「爲人之道」について尋ねているとする。上海博楚簡『仲弓』附簡等に假借字例がみえる。李零に従う。この部分、趙炳清 a は「よもや可能ではないでしょうか」、李綉玲は「まさか要らないことに及ばないのでしょうか？」と譯している。耆老はこの後、人倫などのように専ら人について彭祖に尋ね、天地より人に興味關心を持っていると考えられるから、ここでは天・地・人の中、人の道だけでもよいのではないのかと述べていると考えられる。
- 【73】「于」について。李零・黄&林・趙炳清 a・黄人二・李綉玲は「吁」の假借字とする。黄&林・黄人二は、このような事例は王引之『經傳釋詞』には見られないが、『尚書』堯典に「吁、嚚訟、可乎。」、『同』呂刑に「王曰、吁、來。」とあるように、その語氣はあまり遠慮のないものであると述べる。文脈から李零らに従う。
- 【74】「孳」について。李零は「孳」の假借字とする。趙炳清 a は「孳」が「孜」と同じであり、『尚書』泰誓「孳孳無怠、天將有立父母、民之有政有居。」孫星衍疏「孳、一作孜。」、『漢書』貢禹傳「孳孳于民、俗之所寡。」顔師古注「孳與孜同、孜孜、不怠也。」を引用する。文脈から李零に従っておく。
- 【75】「專」について。李零・趙炳清 a は「布」の假借字とする。黄&林・黄人二は「敷」と讀んで「施」と訓ずるのではないかとし、『詩經』小雅小旻「旻天疾威、敷于下土。」、『說文解字』「敷、施也。」を引用し、そのほか或いは「溥（普）」と讀んで（上海博楚簡『孔子詩論』第3號簡）「徧（あまねく）」と訓ずるとも述べる。これに對して趙炳清 a は、「專」が「布」と讀め、しかも「敷」とも讀めることを指摘し、『說文解字』「專、布也。」、『正字通』寸部「專、敷本字。」を引用する。李綉玲は「溥」の假借字とし、これが『毛詩』に多く見られることを指摘し、周南采芣「溥言采之」、毛傳「詞也」、王夫之『詩經稗疏』「方言、溥、勉也。……溥言采之者、采者自相勸勉也。」などを引用する。李零らに従い、「敷」（あまねく）の假借字としておく。
- 【76】「人綸」について。李零・黄&林・黄錫全・趙炳清 a・黄人二は「綸」を「倫」の假借字とする。黄&林は、「人綸（倫）」とは人道・常道・綱領であり、下文で

いう「五紀不工」・「絶綴」はみな糸をおさめることを例えとしている。郭店竹簡にも議論がこのようになっているものがあり、『孟子』離婁上篇に「規矩、方圓之至也。聖人、人倫之至也。」とあり、恐らく人倫の中において、上は帝王より下は奴婢に至るまでみなそのようであって、聖人（帝王）が天地の間の人道を盡くす最も重要な者であり、簡文の以下にいう「爲人」とは、また帝王の道に就いて論ずる者であることを知るのであると述べる。黄人二は、「人倫」とは人倫の大なるものであり、帝王のことであるから、彭祖がまず言ったのである。恐らく狗老が上天下地のことを汲々と問うたので、彭祖はなげいてまず「人倫」のことを告げたのだらうと述べる。趙炳清 a は「人倫（倫）」を中國古代で人と人との間の関係と遵守すべき行動規範を指すとし、『孟子』滕文公上篇「使契爲司徒、教以人倫、父子有親、君臣有義、夫婦有別、長幼有序、朋友有信。」を引用する。

【77】「喬」について。李零・黄&林・黄錫全・趙炳清 a・黄人二・李綉玲は「驕」の假借字とする。黄&林・黄人二は、「喬」と「勞」が脚韻を踏むとする。上海博楚簡『容成氏』第38號簡等に假借字例がみえる。李零らに従う。『荀子』君道篇に「故君子恭而不難、敬而不鞏、貧窮而不約、富貴而不驕、竝遇變態而不窮、審之禮也。故君子之於禮、敬而安之、其於事也、徑而不失、其於人也、寡怨寬裕而無阿、其爲身也、謹慎脩飾而不危、其應變故也、齊給便捷而不惑、其於天地萬物也、不務說其所以然、而致善用其材、其於百官之事技藝之人也、不與之爭能、而致善用其功、其待上也、忠順而不懈、其使下也、均徧而不偏、其交游也、緣義而有類、其居鄉里也、寬容而不亂。是故窮則必有名、達則必有功。仁厚兼覆天下而不閔、明達周天地地理萬變而不疑。血氣和平、志意廣大行義塞於天地之間、仁智之極也。夫是之謂聖人、審之禮也。」とある。

【78】「斲冬保裘」について。「慎終」については、『老子』第六十四章に「慎終如始。」、『荀子』議兵篇に「凡受命於主而行三軍、三軍既定百官得序羣物皆正、則主不能喜敵不能怒。夫是之謂至臣。慮必先事而申之以敬、慎終如始終始如一、夫是之謂大吉。凡百事之成也必在敬之、其敗也必在慢之。故敬勝怠則吉、怠勝敬則滅、計勝欲則從、欲勝計則凶。戰如守、行如戰、有功如幸、敬謀無壙、敬事無壙、敬終無壙、敬衆無壙、敬敵無壙。夫是之謂五無壙。慎行此六術五權三至而處之以恭敬無壙。夫是之謂天下之將、則通於神明矣。」、『同』禮論篇に「禮者、謹於治生死者也。生人之始也、死人之終也。終始俱善、人道畢矣。故君子敬始而慎終、終始如一。是君子之道、禮義之文也。夫厚其生而薄其死、是敬其有知而慢其無知也。是姦人之道而倍叛之心也。君子以倍叛之心接臧穀、猶且羞之。而況以事其所隆親乎。故死之爲道也一而不可得再復也。臣之所以致重其君、子之所以致重其親、於是盡矣。」とあり、終わりを慎むことを重視する思想が『荀子』にみられる。また、馬王堆帛書『十問』第55～56號簡に「心製（制）死生、孰爲之敗。慎守

勿失。長生纍纍世（世）世（世）、安樂長壽。長壽生於蓄積。」とあって意味がやや近いが、『十問』では長壽が「慎守」の目的となっているのに對し、本篇の「慎終」はあくまでも人倫のあり方に止まっている。「保勞」については、『荀子』脩身篇に「志意脩則驕富貴、道義重則輕王公。内省而外物輕矣。傳曰、君子役物、小人役於物、此之謂也。身勞而心安爲之、利少而義多爲之。事亂君而通、不如事窮君而順焉。故良農不爲水旱不耕、良賈不爲折閱不市、士君子不爲貧窮忘乎道。」とあるように、『荀子』には勞を厭わぬ姿勢を強調する思想が随所にみられるが、ここはそれと關係する表現か。また、『周易』謙卦九三の爻辭と象傳に「九三。勞謙。君子有終吉。象曰、勞謙君子、萬民服也。」、繫辭上傳に「勞謙。君子有終吉。子曰、勞而不伐、有功而不德、厚之至也。語以其功下人者也。德言盛、禮言恭。謙也者致恭以存其位者也。」とあり、苦勞をしても誇らず、手柄があっても誇らないのは「厚の至り」とする。なお、李綉玲は「勞」を勞働の意とし、彭祖が重視する養生との關係が密接だとしている。

【79】「大箠」について。李零は「大匡」と讀むとし、『管子』大匡篇の注によれば「以大事匡君」の意味があると述べる。趙炳清^aは「大匡」について、『逸周書』・『管子』に大匡篇があり、「君王の物欲を匡正し、民と休養生息する」の意であると述べる。李綉玲は隸定した「箠」を「作」の假借字とする。文脈から李零らに従う。

【80】「糞」について。楊澤生は「要」と釋すべきではないかといい、説文古文の要字がこの字に近く、上海博楚簡『仲弓』第13號簡に「唯有粹德」とあり、李朝遠が「孝」の假借字としているが、この文字の左旁が「要」のもう一つの書法ではないかと述べる。そして、古音では「要」は影母宵部、「孝」は曉母幽部に屬して音は互いに近く、『仲弓』の文字は「要」の聲旁を増加したものであるから、『彭祖』のこの前後の部分は「大匡之要、難易滯欲」と讀むべきで、「大匡の要點は容易なことを難くして欲望をとどめる」の意味であるとする。黄錫全は、この字と「要」が共に形聲字であり、「辛(qian)」に従っていて、『彭祖』の方は「妾」に従い「要」の省聲であり、「妾」・「要」共に女を旁とし、隸定すると「嫪」になり、字書にはみえず、「嫪」の別體かもしれないと述べる。そして『仲弓』第13號簡の「孝」字の左旁はまさに「辛」の變體であり、郭店楚簡『性自命出』第38號簡の下から5字目の左旁に似ており、この文字は辛に従い孝の聲であって字書にはみえない。『集韻』文韻に「倬佬、大貌。」とあり、簡文をもし「倬德」と讀めば、「大德」とも理解できる。『彭祖』が告誡するのは「人倫」であり、諸家の見解を合わせると「警戒しつつ驕り高ぶってはならず、常に謹み慎重であって、勤勞を保たなければならない（或いは、勞働實績を褒賞しなければならない）。「大匡」の細かい要點を明らかにしなければならず、難易を知り、貪

欲を滞らせる。」のように理解できそうであると述べる。趙炳清 a は、『楚文字編』をみるに、包山楚簡第 5・75 號簡や郭店楚簡『成之聞之』第 5・27 號簡などに「婁」字があってこの文字と極めて似ており、或いは變體かもしれないと「婁」と隸定し、朱德熙・裘錫圭「戰國文字六種」(『考古學報』1972-1) に従って「婁」と讀むと述べる。李綉玲は「婁」・「謾」の假借字とする。ここは文脈により楊澤生らに従い、「婁」の假借字としておく。

- 【81】「難」について。李零・李綉玲は「難」の假借字とする。上海博楚簡『内豊』附簡に假借字例がみえる。
- 【82】「訖」について。李零は郭店楚簡『性自命出』「身欲靜而勿訖、慮欲淵而勿僞。」にこの字が見えることを指摘する。李銳は、陳劍が「滞」と讀み(陳劍「郭店簡補釋三篇」(『古墓新知一紀念郭店楚簡出土十周年論文集一』、國際炎黄文化出版社、2003 年 11 月))、ここは「易滞欲」と讀めるかもしれないと述べる。黄&林・黄人二は「遣」と讀むのではないかといひ、『説文解字』に「遣、縱也。」とあり、意味は「放走」で、引伸して「排遣(氣を紛らす)」の意になると述べる。そして、周鳳五・劉樂賢が黄&林『上海博物館藏戰國楚竹書(一)研究』(高文出版社、2002 年 8 月) 202 頁注 6 で、前の郭店楚簡『性自命出』第 6 2 號簡の文章と上海博楚簡『性情論』第 2 7 號簡の同じ文字を「遣」と讀んでいることも指摘し、李銳によるこの前後の文章の解釋では意味が通じないことを述べる。楊澤生は李銳に従う。趙炳清 a は、郭店楚簡『性自命出』第 6 2 號簡、上海博楚簡『性情論』第 2 7 號簡のこの字について、周鳳五・劉樂賢が「遣」と讀み、陳劍が「滞」と讀むことを述べて、『六書統』言部「訖、欠而言也。」を引用し、これは話が満足するを得ないことをいひ、抑制するの意とする。李綉玲も「滞」の假借字とする。ここは文脈から「滞」の假借字としておく。
- 【83】「舍」について。李零は「余」と讀み、その下を 2 字の缺字として、上文や第 5・6 號簡と比較し、「告汝」を補い、第 3 號簡との接續關係は不明とする。李綉玲も假借字は李零に従う。
- 【84】「只」について。李零は「躋」の假借字の可能性をいひ、「躋」は精母脂部、「只」は章母支部に屬し、音が近いとする。趙炳清 a は李零に従う。孟蓬生は音がやや遠く假借字例がみられないことから、李零説は議論の余地があると述べ、『詩經』小雅采菽篇「樂只君子」の『左傳』昭公十三年・僖公二十四年における引用文で「只」が「旨」に作られていることなどから、「詣」は古音で脂部にあるが支部の字と通假し、「詣」の假借字として「至る」と解し、『説文解字』言部「詣、候至也。从言旨聲。」などを引用する。李綉玲は、より音が近いとする「底」(端母脂部)に讀み、『國語』周語「底於天廟」韋昭注「底、至也」を引用し、「至る」と解釋する。ここは李綉玲に従う。

- 【85】「椎」について。李零は「墜」の假借字の可能性をいい、「墜」は定母物部、「椎」は定母微部に屬し、音が近いとする。趙炳清 a・李綉玲は李零に従う。上海博楚簡『性情論』第 2 7 號簡の類似の文字は「淵」に假借する。李零らに従う。
- 【86】「困」について。李零・趙炳清 a・李綉玲は「淵」の假借字とする。趙炳清 a は李零に従い、『説文解字』水部「困、古文淵。从口、水。」を引用する。李零らに従う。
- 【87】「息」について。趙炳清 a は「德」の古文とし、『玉篇』心部「息、今通用德。」、『廣韻』德韻「德、德行。息、古文。」を引用する。この字は上海博楚簡等に用例が頻出する。
- 【88】「登」について。黄&林・黄人二は「升」と讀むのではないかといい、郭店楚簡『唐虞之道』第 1 5・1 6 號簡「夫古者、舜居於草茅之中而不憂、升（登）爲天子而不喬（驕）。」を引用し、「升」・「登」2 字は音が近く通假し得ると述べる。趙炳清 a も訓じて「升」と讀むとし、『爾雅』釋古下「登、升也。」、『玉篇』夂部「登、升也。」を引用する。李綉玲は假借字をとらない。文脈から黄&林らの説に従って讀んでおく。
- 【89】「宗」について。李零は「崇」の假借字の可能性を述べる。趙炳清 a は李零に従い、「宗」が「尊崇・取法」の意味にとれるとし、『詩經』公劉篇「食之飲之、君之宗之。」、鄭箋「宗、尊也。」を引用し、「崇」に假借させずともよいことを述べる。李綉玲は李零と同様に讀む。上海博楚簡『容成氏』第 4 6 號簡に假借字例がみえる。ここは李零に従う。
- 【90】「古君之忝」について。李零・趙炳清 a は「古」を「故」、「忝」を「愿」の假借字とする。李零は「忝」が「天」・「困」と韻を踏み、「忝」の下で句が切れると述べる。黄&林・黄人二は「古」をそのまま「古」の意味で讀み、ここはいにしえを援用して説を立てていると述べる。そして李零に従い、「天」・「淵」・「願」が脚韻を踏むことを述べる。趙炳清 a は「忝」・「愿」が共に心に従い、「元」・「原」が通じ、「謹慎・恭謹」の意味にとれるとし、『説文解字』「愿、謹也。」を引用する。李綉玲は李零の脚韻説を否定する。上海博楚簡『仲弓』第 2 6 號簡に同じ假借字例がみえる。ここは李零らに従っておく。
- 【91】「五紀」について。李零は「五紀」と讀む。李銳は、ここは議論が「父子兄弟」にまで及んでいるが、その「五紀」は『尚書』洪範「五紀、一曰歳、二曰月、三曰日、四曰星辰、五曰曆數。」のそれではなく、『莊子』盜跖篇「子不爲行、即將疏戚无倫、貴賤无義、長幼无序。五紀六位、將何以爲別乎。」で子張がいう「五紀」のことである。また司馬彪が既に「六位」は君臣父子兄弟だと指摘しており、このことは顔世鉉「郭店楚簡『六德』箋釋」（『中央研究院歷史語言研究所專刊』72-2、2001 年 6 月）451 頁が郭店楚簡『六德』でも確認している。兪樾は「今按五紀即

五倫也、『家語』入官篇群僕之倫也、王肅注曰、倫、紀也。然則倫紀得通稱矣。」と指摘しており、五倫は君臣・父子・兄弟・夫婦・朋友のことであり、『春秋繁露』深察名號篇に「三綱五紀」とあると述べる。黄&林・黄人二は、帝王術について述べている文脈から李銳説には不確かな点があつて、また『尚書』洪範の「五紀」（歳・月・日・星辰・曆數）も大いにあり得るとし、『説文解字』「紀、別絲也。」を引用する。趙炳清 a は前に彭祖が述べている人倫からみれば李銳説がよいとし、五倫とは人が處るところの父子・君臣・夫婦・長幼・朋友五者間の関係のことでありと述べる。李綉玲は、『彭祖』の「五紀」は消極的な保生思想で、儒家の「五倫」のような積極的なところがなく、両者は恐らく同じものではないとする。「五紀」の意味するところはよく分からないが、直前に「父子兄弟」とあり、文脈からいえば李銳・趙炳清 a のいうように「五紀」がそれと関わりのある語だと考えるのが合理的であり、恐らく本簡の前の脱簡部分で「五紀」に関する解説があつたのだろう。ここで「五紀」に関連する文献を引用しておく。『尚書』洪範「初一日五行、次二曰敬用五事、次三曰農用八政、次四曰協用五紀、次五曰建用皇極、次六曰乂用三徳、次七曰明用稽疑、次八曰念用庶徴、次九曰嚮用五福、威用六極。」「五紀、一日歳、二日月、三日日、四日星辰、五日歴數。」、『莊子』盜跖篇「子張曰、子不爲行、即將疏戚无倫、貴賤无義、長幼无序。五紀六位、將何以爲別乎。。滿苟得曰、堯殺長子、舜流母弟。疏戚有倫乎。湯放桀、武王殺紂。貴賤有義乎。王季爲適、周公殺兄。長幼有序乎。儒者僞辭、墨者兼愛。五紀六位將有別乎。且子正爲名、我正爲利。名利之實、不順於理、不監於道。」、『管子』幼官篇「一舉而上下得終、再舉而民無不從、三舉而地辟散成、四舉而農佚粟十、五舉而務輕金九、六舉而絜知事變、七舉而外内爲用、八舉而勝行威立、九舉而帝事成形。九本搏大、人主之守也。八分有職、卿相之守也。十官飾勝備威、將軍之守也。六紀審密、賢人之守也。五紀不解、庶人之守也。動而無不從、靜而無不同。治亂之本三、卑尊之交四、富貧之終五、盛衰之紀六、安危之機七、強弱之應八、存亡之數九。」

【92】「周」について。趙炳清 a は『廣雅』釋詁四「周、調也。」、『楚辭』離騷「雖不周于今之人兮、願依彭咸之遺則。」王逸注「周、合也。」を引用し、調和するの意とする。ひとまずそのように解しておく。

【93】「攸」について。李零は「修」の假借字とする。黄&林・黄人二は「周」・「修」が脚韻を踏むとする。趙炳清 a は李零に従い、「修」が美・善の意とし、『楚辭』離騷「老冉冉其將至兮、恐脩名之立。」王逸注「修、美也。」を引用する。孟蓬生は字形・音韻上から黄説を否定し、「攸」に隸定して「比」の假借字であつて親近の意とし、この後の「失」と通韻するとする。そして通行本『周易』比卦六四の爻辭「外比之、貞吉。」を引用し、上海博『周易』で「比」を「攸」に作るこ

とを述べる。李綉玲は左傍の字形が本篇の書きぐせによることを述べ、李零に従う。ここは李零に従っておく。

- 【94】「工」について。黄&林・黄人二は「巧飾」のこととし、『説文解字』段玉裁注に「引伸之、凡善事曰工。」とあるから、「工」は善を爲すと訓ずることができる。『鶡冠子』武靈篇「工者貴無與爭。」の宋・陸佃解に「工、猶善也。」とあって能力・巧みさがある意であり、『莊子』庚桑楚篇「羿工乎中微而拙乎使人无己譽。」の唐・成玄英疏に「工、巧也。」とあり、古代女子が刺繍することを「工事」といい、『管子』問篇に「處女操工事者幾何人。」とあるのは「五紀、不工」のことであり、恐らく刺繍することの比喻であると述べる。趙炳清 a は『説文解字』「工、巧飾也。」段玉裁注「引伸之、凡善其事曰工。」を引用し、「工」が「善」と讀めるとして處理することを善くするの意とする。李綉玲は黄説を否定し、この「工」字に縦畫が2本あるのは、書き誤りの可能性もあるとする。「工」を「功」に假借する用例は上海博楚簡『周易』第16號簡などにみられる。ここは黄・趙説に従い、「巧」の假借字として「善」の意味にとっておく。
- 【95】「咎」について。李零は第6號簡の「余告汝咎」と類似の文になると考えて「禍」と讀むのではないかとする。そして、この簡に残された切り口は第1または第2の繩にあたるが、上下2簡の接續關係は不明とする。この文字は上海博楚簡『性情論』第40號簡等で「過」に假借している。黄人二も「禍」と讀む。李綉玲は下傍が「止」ではないかとし、李零に従う。文脈から李零に従っておく。
- 【96】「懋」について。李零・趙炳清 a ・李綉玲は「謀」の假借字とする。趙炳清 a は「懋」・「謀」が共に明紐支部の字であって通假し、『集韻』侯韻「謀、或作懋。」を引用し、郭店楚簡『老子』甲篇第25號簡・『語叢四』第13號簡の「懋」を「謀」と讀むことを述べる。ここは李零らに従っておく。
- 【97】「述愴之心」について。李零・趙炳清 a ・李綉玲は「述」を「愴」の假借字とする。黄&林・黄人二は、この表現が傳世文獻にしばしば見られるとし、『孟子』公孫丑上篇「今人乍見孺子將入於井、皆有愴愴側隱之心。」を引用する。趙炳清 a は「愴愴」をいましめおそれるの意とし、『尚書』冏命「愴愴惟厲、中夜以興、思免厥愆。」、前掲『孟子』公孫丑上篇の文を引用する。その外、『管子』小匡篇に「是故天下之於桓公、遠國之民、望如父母、近國之民、從如流水、故行地滋遠、得人彌衆。是何也、懷其文而畏其武、故殺無道、定周室、天下莫之能圍、武事立也。定三革、偃五兵、朝服以濟河而無愴愴焉、文事勝也。是故大國之君慚愧、小國諸侯附比。是故大國之君、事如臣僕、小國諸侯、驩如父母。夫然、故大國之君不尊、小國諸侯不卑。是故大國之君不驕、小國諸侯不懼。」、『楚辭』九辨に「蟋蟀鳴此西堂、心愴愴而震盪兮。何所憂之多方、印明月而太息兮、步列星而極明。」とあり、おそれるの意である。李綉玲は『尚書』冏命の用例を不適當とする。李零らに従う。

- 【98】「甬素」について。「甬」を李零・趙炳清 a・李綉玲は「用」の假借字とする。趙炳清 a は、「用」・「甬」は古文獻では一字であり、桶形であって、だから「甬」は一般に「用」と読み、例えば鄒陵君（王子申）豆「后嗣甬之」（集成 9.4694、4695）の「甬」はまさに「用」に作るべきであると述べる。また、黄&林・黄人二は、「遠慮甬素心白身澤、余告女咎。」の句讀點を「遠慮甬素、心白身澤。余告女咎、」とするべきで、倒置ではないかとする。趙炳清 a は黄&林・黄人二説に従う。上海博楚簡『周易』第 1 2 號簡等に假借の用例がみえる。李零らの假借字、黄&林・趙炳清 a の句讀點に従う。「素」は、『禮記』仲尼燕居篇に「子曰、禮也者、理也。樂也者、節也。君子無理不動、無節不作。不能詩、於禮繆。不能樂、於禮素。薄於德、於禮虛。」の鄭注「素、猶質也。」とあるように、飾り氣のないことか。
- 【99】「心白身澤」について。「澤」を李零・趙炳清 a は「釋」の假借字とする。趙炳清 a は、ゆったりする、苦痛から抜け出すの意とし、『説文解字』水部段玉裁注「澤、又借爲釋字。」を引用する。孟蓬生は假借字をとらず潤澤・光澤の意とする。文脈からここは李零らに従っておく。「心白」について、『莊子』天下篇に「不累於俗、不飾於物、不苛於人、不伎於衆。願天下之安寧、以活民命、人我之養畢足而止。以此白心。古之道術、有在於是者。宋鉞尹文聞其風而悅之。」とあり、心が清くなるの意であろう。『老子』第十章には「載營魄抱一、能無離乎。專氣致柔、能嬰兒乎。滌除玄覽、能無疵乎。愛民治國、能無知乎。天門開闔、能爲雌乎。明白四達、能無爲乎。生之畜之、生而不有、爲而不恃、長而不宰。是謂元玄德。」とあり、精神修養のための呼吸法に通ずるような表現がみられる。なお、李綉玲はこの個所を、多すぎる欲望は不要との意にとっている。
- 【100】「余告女咎」について。黄&林・黄人二は、第 2 號簡「余告汝人倫」・「余〔告汝〕□」、第 5 號簡「余告汝禍」とここの「余告汝咎」とについては、いずれも「告」の前の語句が一つの話の終わりを表しているとする。そして、「咎」と第 7 號簡の「憂」字が脚韻を踏んでいるとする。「咎」を告げていることからすぐに想起されるのは『周易』であるが、この文章の前後のみから本篇との関係を速断することはできない。
- 【101】「忪」について。李零は「務」の假借字ではないかとする。趙炳清 a は、心に従う矛の聲で、「懋」の省文とし、郭店楚簡『性自命出』第 4 7 號簡にこの文字があり、「懋」と読んでおり、『説文解字』心部「懋、勉也。」とあって勤勉の意にとれるとする。孟蓬生は、古音で「謀」が明紐之部、「忪」が明紐幽部で韻部が近く假借可能とする。李綉玲は李零に従うと共に、この前の「呂」を「怡」と読む。文脈から孟蓬生に従って読んでおく。
- 【102】「𦉳」について。李零は、一般の「憂」字と書法があまり似ておらず、後に出てくる「𦉳」と関係あるかもしれないとする。趙炳清 a は、郭店楚簡『老子』

甲篇第34號簡・『唐虞之道』第16號簡・『六德』第41號簡はみな「愬」に隸定し、『説文解字』心部に「愬、愁也。从心从頁。」、『正字通』心部に「愬、憂本字。」とあって、憂慮・心配するの意とする。黄人二は第6號簡末尾の「咎」と脚韻を踏むとする。とりあえず「憂」に読んでおく。

【103】「愬」について。趙炳清 a は『玉篇』心部「愬、古測字。」、『説文解字』「測、痛也。从心則聲。」、『廣雅』釋詁三「測、悲也。」を引用し、痛み悲しむの意とする。李綉玲は、同様の例が郭店楚簡『語叢』二第2號簡「測（賊）生於忌」にみられることを指摘する。

【104】「一命」について。趙炳清 a は、『禮記』曲禮鄭注に「凡仕者、一命而受爵、三命而受車馬。」とあり、「爵」は『集韻』藥韻「爵、爵位也。」、『禮記』王制「王者之制祿爵、公侯伯子男凡五等。」とあって、衣服は、君主にまみえる時に着る朝服、祭祀にあずかる時に着る祭服、或いは戦車に乗る時に着るよろいであり、『左傳』（僖公二十八年）に晉の文公が周天子にまみえ、襄王が大輅の服・戎輅の服を賜ったとあることを指摘する。そして、馬車は戦闘・祭祀・朝見時に乗る車を指し、『左傳』に魯の叔孫豹が王に聘せられ、大輅を賜ったとあって、爵位・衣服・馬車はみな君王が與え、手柄を賞することによるものであり、本簡最初の「一命」は『禮記』の「一命」に相當し、後の「一命」は『禮記』の「再命」に相當すると述べる。李綉玲は趙説に疑問を呈する。ここでは特に周代封建制について述べているわけではなく、名譽を受けた時という程度の意味合いで「一命」・「三命」が用いられていると思われる。

【105】「褻」について。李零は「修」と讀むかもしれないとする。趙炳清 a は、この字が「脩」の變體かもしれないとした上で、『集韻』尤韻「修、或通作脩。」を引用し、「修」はいましめるの意とし、『國語』魯語下「吾翼而朝夕修我曰、必無廢先人。」韋昭注「修、傲也。」を引用する。孟蓬生は、『左傳』昭公七年・『莊子』列御寇篇を引用し、この前後の簡文前半は侯部で押韻しており、對比の手法を使っていて、前半の態度はへりくだっていて慎み深く、後半はおごりたかぶって輕薄で『莊子』の語と似ているとし、この字は「低頭」の意とする。そして、百に従う攸の聲で、その音義は「𠂔」または「𠂔」に近く、『説文解字』𠂔部に「𠂔、草木實垂𠂔𠂔然、象形、讀若調。」、『同』見部に「𠂔、下視深也。从見𠂔聲。讀若攸。」とあり、𠂔聲の字に古くは「下垂」の意があり、攸・𠂔は古音が同じだと述べる。そして、またはそのまま「𠂔」と讀め、古人は視線が下であることを遜るとし、視線が上であることを傲慢だとすると述べ、『禮記』曲禮下篇「凡視上於面則傲、下於帶則憂。」などを引用する。李綉玲は趙・孟兩説を折衷して解釋する。ここで關係する表現を引用しておく。『左傳』昭公七年に「孟僖子病不能相禮、乃講學之、苟能禮者從之。及其將死也、召其大夫曰、禮、人之幹也。無

禮、無以立。吾聞將有達者曰孔丘、聖人之後也、而滅於宋。其祖弗父何以有宋而授厲公。及正考父、佐戴武宣、三命茲益恭。故其鼎銘云、一命而僂、再命而僇、三命而俯、循牆而走、亦莫余敢侮。饁於是、鬻於是、以餉余口。其共也如是。、『莊子』列御寇篇に「正考父一命而僇、再命而僂、三命而俯、循牆而走。孰敢不軌。如而夫者、一命而呂鉅、再命而於車上僇、三命而名諸父。孰協唐許。」とある。上海博楚簡『性情論』第25號簡等に「攸」の字があり、「修」に假借している。文脈から孟蓬生に従っておく。本篇第7・8號簡の内容は、孟蓬生の述べるように『莊子』列御寇篇の内容にかなり近い。

- 【106】「愈」について。黄&林・黄人二は「降」の假借字ではないかとし、郭店楚簡『老子』甲篇第19號簡「以逾甘露」が通行本では「以降甘露」となっていることを指摘し、「愈」・「厚」・「主」が脚韻を踏むことを述べる。趙炳清 a は「賢良」の意とし、『廣雅』釋言「愈、賢也。」を引用し、「益愈」とは「更に賢良を加える」の意とする。李綉玲は口語の「進歩」のような意味だとする。ここは意味のとりやすい趙炳清 a 説に従っておく。
- 【107】「自厚」について。李綉玲は重の意とする。『墨子』尚賢上篇に「子墨子言曰、今者王公大人爲政於國家者、皆欲國家之富、人民之衆、刑政之治。然而不得富而得貧、不得衆而得寡、不得治而得亂、則是本失其所欲、得其所惡、是其故何也。子墨子言曰、是在王公大人爲政於國家者、不能以尚賢事能爲政也。是故國有賢良之士衆、則國家之治厚、賢良之士寡、則國家之治薄。故大人之務、將在於衆賢而已。」とある。ここはおのずから勢力が大きくなるという意か。
- 【108】「宐」について。李零は「主」の假借字とする。趙炳清 a は李零説に従った上で、王筠『説文句讀』「主者、古文假借字也。宐則後起之分別字也。」を引用する。上海博楚簡『東大王泊旱』第6號簡に假借字例がある。文脈から李零らに従う。
- 【109】「臙」について。李零は「臙」字と反対の意味のようだとする。趙炳清 a は、「襄」が包山楚簡第103號簡・第155號簡・第170號簡に見え、鄂君啓節に「襄」字があるが、「土」に従っているとし、『説文解字』「臙、益州人鄙言人盛、諱其肥、謂之臙、从肉襄聲。」を引用し、「肥満している」の意で、引伸して「満足・自満・自大」の意になるとする。孟蓬生は、この字は「襄」の假借字で「上がる」の意であり、先の「臙」と對になっているとし、『尚書』堯典「湯湯洪水方割、蕩蕩懷山襄陵、浩浩滔天。」の某氏傳「襄、上也。」などを引用する。李綉玲は趙・孟兩説を折衷して解釋する。どちらともとれるが、ここは幾分説得力のある孟蓬生に従っておく。
- 【110】「吳」について。李零は「殃」の假借字とする。黄&林・黄人二はこの字が第8號簡の「長」字と脚韻を踏むとする。趙炳清 a は、この字は「央」であり、『戰

國古文字典』を調べると、同様の文字が天星觀第4504號簡・第4608號簡、包山楚簡第201號簡に見られ、「殃」は「央」の派生字であるから「殃」と讀むと述べる。李綉玲は李零に従う。ここは李零らに従う。

- 【111】「𡗗」について。李零は「遭」の假借字とする。趙炳清 a は、この字は「造」で「遭」に通ずるとし、朱駿聲『説文通訓定聲』孚部「造、假借爲遭。」を引用する。李綉玲は「造」（清母覺部）と「遭」（精母幽部）が音韻が近く、通假し得るとする。文脈から李零らに従う。
- 【112】「綵」について。李零は「輟」の假借字とする。黄&林は李零説に従いながらも、「綴」の假借字である可能性を考慮し、「蔡」の古音は祭部清母、「綴」・「輟」は共に月部端母で音が近く假借可能とし、「絶」は糸を斷つ意、「綴」はつづりつらねるの意で、合わせて反義複合詞となる。「綴」はまた名詞の「結」でもあり得るが、『詩經』商頌長發「爲下國綴旒。」の鄭玄注に「綴、猶結也。」とあると述べる。趙炳清 a は、「絲」に従う「蔡」の聲として黄&林説に従い、「綴」は『廣雅』釋詁「綴、連也。」、『集韻』祭韻「綴、連綴。」を引用し、つらなるの意で引伸して「後嗣子孫」になるとし、「絶綴」を子孫が斷絶する意と解している。李綉玲は李零に従う。文脈からここは趙説に従っておく。
- 【113】「𡗗」について。李零・黄&林・黄人二・李綉玲は「絶」の假借字とする。趙炳清 a は文脈から李零説に従う。ここは李零らに従っておく。
- 【114】「𡗗」について。李零・趙炳清 a ・李綉玲は「富」の假借字とする。趙炳清 a はこの字を「富」の變體とする。上海博楚簡『周易』第12號簡等に假借字の用例がみえる。李零らに従う。
- 【115】「𡗗」について。楊澤生は、『説文解字』手部によると「扶」・「揚」・「播」の古文はそれぞれ「𡗗」・「𡗗」・「𡗗」に作り、ここの文字はまさに「抽」の異體字である。「抽」にははっきりしめすの意があり、『楚辭』九章惜往日に「君無度而弗察兮、使芳草爲藪幽。焉舒情而抽信兮、恬死亡而不聊。」とある。簡文の「毋抽富」の意味は、財産を見せびらかすなということであると述べる。趙炳清 a は楊澤生に従う。孟蓬生は、古音で由聲と逐聲は通ずるとして「逐」の假借字とし、「逐富」で富貴に取り入って付き従うの意とする。李綉玲は孟蓬生に従う。楊・孟説いずれとも決し難いが、ひとまず孟説に従っておく。ここでは富の所有それ自體を否定しているわけではなく、富を所有することによって驕り高ぶることを禁止しているものと考えられる。『荀子』脩身篇に「君子貧窮而志廣、富貴而體恭、安燕而血氣不惰、勞勸而容貌不枯、怒不過奪、喜不過予。君子貧窮而志廣、隆仁也。富貴而體恭、殺執也。安燕而血氣不惰、柬理也。勞勸而容貌不枯、好文也。怒不過奪、喜不過予、是法勝私也。書曰、無有作好、遵王之道、無有作惡、遵王之路。此言君子之能以公義勝私欲也。」とあり、富貴であっても姿態恭しい

というのがこの意味に近い。

- 【116】「𦣻」について。李零・趙炳清 a・李綉玲は「賢」の假借字とする。趙炳清 a はこの字を「賢」の古文とする。この文字は楚簡にしばしば見える。李零らに従う。
- 【117】「𦣻」について。楊澤生は「訶」と讀むのではないかとし、それはどなりつける意味であり、「母訶賢」とは賢人をどなりつけるなという意味であると述べる。趙炳清 a は「可」・「力」に従い、左右の旁を逆に隸定することもでき、「𦣻」と讀めるかもしれない、「絞め殺す」の意になるとする。孟蓬生は楊澤生に従う。李綉玲は、本字が包山楚簡に人名として多くみられることを指摘し、「可」（溪母歌部）と「誇」（溪母魚部）が通假し得るとして、「誇」と讀む。いずれとも判別し難いが、賢者に對してふさわしからぬ態度で接することをいうのであろう。文脈からひとまず李綉玲に従っておく。
- 【118】「𦣻」について。楊澤生は「瀆」或いは「短」の假借字ではないかとする。そもそも「瀆」の意味なら侮辱する・侮るの意味になるとし、『左傳』桓公十八年「十八年春、公將有行、遂與姜氏如齊。申繻曰、女有家、男有室、無相瀆也、謂之有禮。易此必敗。」、『禮記』表記「子曰、裼襲之不相因也、欲民之母相瀆也。」を引用し、またもし「短」の意味なら缺點を指摘する・過失を暴くの意味になるとし、『史記』屈原賈生列傳「令尹子蘭聞之大怒、卒使上官大夫短屈原於頃襄王、頃襄王怒而遷之。」を引用し、「母相短」は互いに侮るな、或いは互いに缺點を暴くなという意味だとする。趙炳清 a は『説文解字』「短、木豆謂之短。从木豆聲。」、『玉篇』木部「短、木豆謂之短、薦羞菹醢也。」を引用し、思うに一種の肉を盛り祭祀に獻ずる食器類であり、引伸して美食となると述べる。孟蓬生は「豎」の假借字とし、『説文解字』𦣻部に「豎、立也。从𦣻豆聲。」とあって共に豆の聲であり、『周禮』天官序官「内豎倍寺人之數。」の鄭注「豎、未冠者之官名。」などを引用し、齊桓公の豎刁・秦二世皇帝の趙高のように往々にして權力を握って私し、家を敗り國を亡ぼすもので、士大夫はこれと伍することを潔しとしなかったことを述べる。また、上海博楚簡『曹沫之陳』第 27・45 號簡で李零は「𦣻」を「誅」に假借しており、「豆」・「短」は定母侯部、「瀆」は定母屋部、「短」は端母元部、「豎」は禪母侯部、「誅」は端母侯部である。李綉玲は「樹」の簡體とし、その前の字とあわせて、樹木を植えるのを尊ぶ意と解釋する。楊説では假借に問題があり、趙説では引伸義に疑問が残り、李綉玲説は強引な印象がある。ここは孟蓬生に従っておく。
- 【119】「向」について。楊澤生は「相」の假借字ではないかとする。趙炳清 a は「向」・「相」は通じないとして楊澤生説を否定し、『集韻』漾韻「向、趣也。」を引用し、「尊ぶ・向かう」の意とする。孟蓬生も楊澤生説を否定し、「嚮」の假借字で

「向かう」・「近づく」の意に解する。李綉玲は本字を楚系文字特有の書法とし、『説文解字』の「尚」が向の聲に従っていることから、「尚」の假借字とする。ここは前の注で孟説に従ったことから、同じく孟蓬生に従っておく。

- 【120】「旨」について。李零・趙炳清 a・李綉玲は「稽」の假借字とする。黄&林はこの前後の文章について、青銅器銘文に「再拜稽首」がつけねに見えるが、この意味と通ずるものがあることを述べる。
- 【121】「勛」について。李零は「敏」の假借字とする。李綉玲は李零に従う。ここは李零に従う。
- 【122】「得」について。李零は「得」の假借字とする。趙炳清 a は李零に従った上で、羅振玉『増定殷墟書契考釋』に甲骨文は「从又持貝、得之意也。或増彳。許書古文从見、殆从貝之譌。」とあるのを引用する。李綉玲も李零に従う。上海博楚簡『周易』第14號簡などに假借字の用例がみえる。李零らに従う。
- 【123】「忒」について。李零は「恐」の假借字とする。趙炳清 a は「恐」の古文とし、『説文解字』「恐、惧也。从心巩聲。忒、古文。」を引用する。李綉玲は李零に従う。上海博楚簡に用例がみられる。李零に従う。
- 【124】第1號簡。耆老が彭祖に、長生きした自己の身を高め、禘祭・嘗祭という重要な季節祭で心安らかになる方法について尋ねる。彭祖は耆老の質問を褒めた上で、天の道の解説に入る。
- 【125】第3號簡。彭祖が天の道について語ったのを承けて、耆老は、自分はいまだに天道に則ることができないからとした上で、「爲人」、つまり人道について尋ねている。この疑問が、第2號簡の彭祖による、天・地・人に關する引用文に繋がることになる。
- 【126】第2號簡。彭祖が、天道とは天・地・人が經緯・表裏の如く密接な關係性を有するといわれていることを、引用文として述べる。耆老は次に、天・地・人から天・地を取り去り、後に残る「人」だけでも構わないのではないかと述べる。これに對して彭祖は人倫について語り、「他人を戒めても驕ることなく、物事の終わりを慎んで勞を保つ」こと、「大匡」の要點は欲望を抑制することだと述べる。第3號簡と同様に、耆老は天・地・人の中で、特に人道に對して關心を寄せている。
- 【127】第4號簡。全て會話文だが「夫子」という單語がみられるため、話者は耆老である。頂点を極めれば下降線を辿るという、『周易』と關連性をもつような思想がみられる。そして、彭祖の徳が高みを極めたのに、その上何を崇めればよいのかと尋ねている。それに續いて、君がつつしめば、という文があり、この先では君主が謙遜することについて述べられていると想定される。
- 【128】第5號簡。「舍」が「汝」にもこの構文は第2號簡の彭祖の會話文にみえる

ため、彭祖の會話文である。「五紀」が満ち足りていれば、貧しくとも人に親しむことができるが、「五紀」が充足されていないならば、富んでいても人を失うとある。「五紀」の詳しい意味内容は不明であるが、それが人々から親しみを得られるかどうかを決定する要素とされている。

【129】第6號簡。ここも第5號簡同様に彭祖の會話文である。過度におそれてはならず、遠く慮り飾り氣をなくせば、心身が潔白でゆるやかになるとある。後の第7・8號簡とあわせて、『禮記』大學篇ほど議論として整ってはいないが、修身が齊家・治國・平天下に繋がるといった議論を想起させるところがある。また本篇で唯一、養生術に近い内容がみられる部分でもある。しかしこれが本篇の主題というわけではない。

【130】第7・8號簡。本篇の結論部分にあたり、中心となる思想が開陳される。まず耆老により、謀略や他人を損なうことなどの禁止が述べられる。次に彭祖により、名譽を受けても遜っていれば君主に至るが、逆に驕り高ぶれば身の破滅に至ることが説明され、最後に富の開示の禁止・賢人への無禮の禁止などが述べられる。「一命」以下の部分については、孟蓬生がいうように『莊子』列御寇篇の内容に近いものがあるが、本篇では「一命」・「三命」を受けた時の態度によって、それに應じた結果を招来することが付け加えられている。また「一命」・「三命」がみられることから、君主ではなく士階層のような支配階層が本篇の對象として念頭に置かれているといえようが、身の處し方によっては「百姓の主」になれるということから、一種のレトリックとはいえ、君主の地位への上昇可能性が述べられていることになる。その君主に上昇するには、三命を受けて四度遜る、つまり一命より上位の命を受けた上で、更に多く遜ることが必要である。そして、幸福のあり方が社会的な勢力拡大・上昇である一方で、災厄のあり方には血縁主義的なものが反映されていると思われる。これらのことから禅讓による君位交替を想起することが可能であろう。その背景としては同じ上海博楚簡『容成氏』などにみられる禅讓の肯定があるとも考えられる。逆に三命を受けて四度驕り高ぶれば「絶綴」するわけだが、ここは血統の断絶のことをいっているのではないだろうか。つまり、命を受けた時に遜った場合は、賢者を増す(有能な臣下の増大)→自厚(勢力拡大)→百姓の主(君主)、驕り高ぶった場合は、災厄に遭う→不長(夭折)→絶綴(血統断絶)の順に程度が甚だしくなっていく。この2簡は秦漢以降の房中術に繋がる部分がみられず、節制・尊賢を説く墨家や同じく尊賢を説く儒家系思想、特に革命肯定の『孟子』、そして『莊子』と共通する部分を含んでいる。

【おわりに】

本篇は隸定や假借字のとり方によって、内容の解釋がかなり變化する。そのため、全體を通觀するにあたっては、細部の解釋に、ある程度の揺れがある可能性を予めお断りしておく。

本篇のタイトルになっている彭祖は、『荀子』・『莊子』や晉の葛洪『抱朴子』などにみえる。『莊子』刻意篇に「吹呬呼吸、吐故納新、熊經鳥申、爲壽而已矣。此道引之士、養形之人、彭祖壽考者之所好也。」とあるが、本篇ではそれに關連する内容はみえない。出土史料では、圖版の「説明」にあるように、馬王堆帛書『養生方』の十問篇に、王子巧父が彭祖に人の氣で何が精かと問いたずねる文章があるが、内容は本篇と關連性をもたない。

黄&林は本簡の筆跡が上海博楚簡『容成氏』に近似することをいい、『漢書』藝文志の陰陽二十一家に『容成子』十四篇、房中八家に『容成陰陽』二十六卷がみえるが、傳世文獻と出土史料から、容成氏と彭祖は共に史官の身分にあり、耆老は帝王であつて、孟子と梁の惠王のような間柄を反映していると述べる。坂出祥伸「彭祖傳説と『彭祖經』」（山田慶兒編『新發現中國科學史資料の研究—論考篇—』、京都大學人文科學研究所、1985年12月）は彭祖傳説と『彭祖經』の成立過程について詳細に論じており、その中で馬王堆帛書『養生方』についても触れている。そこで坂出論文に據つて彭祖傳説を簡單にみておく。

彭祖を封國の名と解し、それが八百年間存續して殷代の末ごろ滅んだというのが『國語』・『大戴禮記』・『逸周書』などの古文獻を通してうかがえる傳承であり、坂出はこれを「原・彭祖傳説」と呼んでいる。そしてそれが西周から春秋戰國時代にかけての間に、彭祖長生傳説へと變化したものと推測している。そしてその彭祖を長生たらしめた術として、一般に秦から漢代初期の成立とされる『莊子』刻意篇に呼吸法・導引がみられるように、養生術が現れてくるのである。馬王堆帛書『養生方』（前漢文帝12年（前167年）埋葬の第3號墓からの出土だが、文字が篆隸並存していることなどから成立は先秦時代に遡ると推測される）では、彭祖は養形（導引・行氣）による長生を説いている。だがやや時代が下る『呂氏春秋』（仲春覽情欲篇・審分覽執一篇・離俗覽爲欲篇に彭祖の名がみられる）では養形よりも養神（無欲・治性など）が重視されている。審分覽執一篇には「因性任物」という考えがみられるが、これは恐らく莊子ないし莊子學派の影響であり、戰國末から秦・漢初にかけての間、莊子學派の活躍とその思想的影響によって、彭祖像に變化が生じたと推測する。そして三國から西晉になると、彭祖は老子に匹敵するほどの道の體得者として高い位置を與えられるのである。袁珂「彭祖長壽的神話和仙話」（『袁珂神話論集』、四川大學出版社、1996年9月）は、彭祖を國族・部族名とし、商末に滅亡した彭祖族が、後に個人名として傳わり、長生傳説が生まれたとする。湯淺は、上海博楚簡『彭祖』について、その主題が天地の道や人倫・國家の永續であり、彭祖が個人として描かれるにもかかわらず、

個人の長生が説かれることはないとする。そして、「彭祖」という名が國名から個人名へと變化していく流れの中間点・轉換点に位置するとし、また『老子』との思想的類似性や『論語』述而篇「子曰、述而不作、信而好古、竊比於我老彭。」の「老彭」を彭祖とする皇侃の解釋から、老子や孔子との關係を解明する可能性を秘めていると考えている。以上、彭祖に關する先行研究はいずれも、彭祖の名が國名や族名から個人名へと移行し、長生傳説が發生したと理解している。本篇に關する先行研究はおおむね、本篇をそうした彭祖傳説の成立過程において、いかに位置づけるかを課題としている。

馬王堆帛書『養生方』の十問篇には、彭祖と耆老という本篇と共通する登場人物がみられるが、坂出がいうように、その内容は題名の通り養生術である。一方、本篇は耆老が長生した人物として描かれるだけで、養生術に關する具體的な記述はみられない。本篇第2號簡の「之を戒むるに驕る毋く、終わりを慎み勞を保つ」、第6號簡「遠く慮りて素を用いれば、心白く身釋す。」などにみられるように、精神・肉體の潔白さ・素朴さを重視した議論がみられるものの、長生の方法を説いているわけではなく、これを養生術とはいえない。また『養生方』は「天地」について述べ「人」には触れないが、本篇は「天地」より「人」を論ずるのである。その「人」の道とは、全篇を通じて述べられている、謙讓の精神・虚飾の禁止ということになる。そして『彭祖』の結論部分にあたる第7・8號簡では、そうした人の道に沿った身の處し方をしていれば人に親しまれて自勢力が擴大し、究極的には「百姓の主」になるといった、『禮記』大學篇にあるような修身・齊家・治國・平天下をやや簡略化した、禪讓の肯定が背景にあるような表現までみられ、『容成氏』・『子羔』とも關連性のある思想内容をもつ。本篇はあくまで、戰國期の統治エリート層における謙讓の精神が強調された「人の道」を説いているわけである。また、本篇に出てくる表現は、『荀子』・『莊子』に近いものを中心としており、本篇の成立事情を反映していると考えられる。なお、趙炳清は、第5號簡の「五紀必周……」と『慎子』逸文・『文子』上禮篇との對比等から、本篇を楚國の黃老學派の作品とするが、行論に飛躍・推測が多く説得力に缺ける。本篇は養生術に關する思想を述べたものではないとはいえ、養神に連なる表現がみられるわけであるから、坂出が『莊子』の思想的影響から養生術の變化をみたように、戰國から秦漢期の養生術に影響を與えた可能性がある。また本篇の成立には、戰國期における、秦漢期の養生術に先行する思想状況が反映されているとも考えられる。